

メラノーマ新薬有効性確認

東北大グループ 国の承認目指す

東北大医学系研究科の藤村卓准教授（皮膚科学）らのグループは、皮膚がんの一種であるメラノーマ（悪性黒色腫）について、患者の免疫環境を整えて治療を補助する新たな内服薬の

有効性を確認したと発表した。来年2月から最終段階の臨床試験（治験）を行い、国の承認を目指す。

メラノーマは、メラニン色素を作る細胞が悪性化し、手や足などの皮膚に黒

色の腫瘍ができる希少がん。進行すると死亡率が高く、国内の患者は約5000人とされる。治療として「オプジーボ」が使われてきたが、日本人患者で有効なのは約2割にとどま

り、耐性ができて効かなくなることもあった。

藤村准教授らは2021年9月～23年3月、東北大のグループが開発した新薬で、がん細胞が攻撃から身を守っている膜を中和する働きを持つ化合物「TM5614」をオプジーボと併用する医師主導治験を行った。

患者39人に1日3錠の錠剤を2カ月間投与したところ、半数以上の患者の症状

が半年間悪化せず、投与終了後もオプジーボの効果が続いたという。効果を高める従来の薬では約6割の患者に重大な副作用が出ていたが、新薬では7・7%と、安全性も高いとみられる。

新薬は肺がんや慢性骨髄性白血病など他のがんにも使える可能性があり、各地で治験が進んでいる。藤村准教授は「さまざまながんの治療につながり、多くの人を救える薬。承認に向け、より長期の治験で効果を検証したい」と意気込む。